

藤田哲也名誉会員の研究業績を偲ぶ

日本気象学会名誉会員藤田哲也シカゴ大学名誉教授は1998年11月19日シカゴで78歳の生涯を閉じられた。生前の教授の研究活動を多少なりとも知る者の1人として、教授の御業績を偲び、その個性的な研究活動を今後の私達の研究の参考としたい。

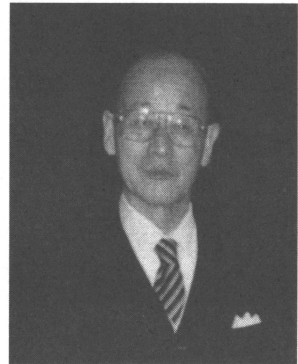
藤田教授は1920年福岡県に生まれ、九州工業大学に在職中の1950年頃、稠密な地上観測データに「短時間内の定常性を仮定した時間空間の変換方法」を応用した台風の微細構造や雷雨の解析的研究の論文を次々と発表された。当時の東京大学気象学教室の正野重方教授はその成果を高く評価され、藤田教授は東京大学から理学博士の学位を受けられた。藤田教授は生前折に触れ、研究の当初においての正野教授のエンカレジメントに対し感謝の意をもらされておられた。

藤田教授の雷雨のメソ解析の論文はサンダーストームプロジェクトの統括者シカゴ大学のバイヤース教授の注目するところとなり、1953年シカゴ大学に移られ、以後40数年にわたり、同大学で多彩な研究活動を展開された。

藤田教授の広範な研究活動を要約することは困難であるが、シビヤーストーム、スコールライン、トルネード等のメソスケール解析の分野で大きな業績をあげられた。特に、メソスケールの概念の確立、ストームの分裂、トルネード内部の複数の吸い上げ渦 (suction vortex)、ダウンバースト、マイクロバーストの発見等はそれまでの常識を覆すものとして、発表の当初は賛否両論をひき起こしたと伺っている。

これらの研究成果は多くの論文や専門書に多数引用されているが、米国および日本の或る専門書では、ダウンバースト、マイクロバーストの用語やフジタの名すら一切記述していない。科学の社会でも個性が有り、好き嫌いがあるのは興味深い。

またハリケーンや台風の強風分布の微細構造の研究、トルネード強度に関する「Fスケール」の導入、ダ



ウンバースト、マイクロバーストの発見等は、風災害の軽減、航空機事故の防止など、社会的にも大きく貢献する研究として高く評価されている。

さらに、1960年代の気象衛星データの解析方法の開発の業績も忘れてはならない。現在では想像もできないが、当時は、雲画像上の緯度経度やセンサーのスキャンポイントの位置を正確に決定する事すらが困難であった。藤田教授は航空測量の原理や球面三角法を利用して問題を解決し気象衛星データの気象解析への道を開かれ、御自身のメソ解析にも活用された。1970年代初期、静止気象衛星雲画像の動画から雲移動ベクトルを求め高層風を推定し解析に利用した先駆者でもあった。

これらの多くの功績によって、多くの賞を受賞しておられる。

このように多くの分野にわたる藤田教授の研究の基本姿勢は徹底した実証主義であった。それは、1枚の地上観測日記記録、1枚の断熱図、1枚の画像、1つのフライトレコーダー、地面に残された風害の痕跡、ダウンバーストに遭遇したパイロットの体験談をも大切に分析する姿勢であり、なにか問題を感じれば観測プロジェクトを組織し自らが現場の観測に乗り出して現象の実体を確認しなければ止まぬ精神である。そして新しい観測事実が見つければ、既成の概念や理論に拘束されることなく、新現象として命名し新概念を

構築する開拓者の精神でもある。

研究の様々な局面では躊躇せず、必要な器材設備を投入された。それらの器材設備は研究室の基盤的施設として、その研究のみならず継続する種々の研究にも有効に活用されていた。1960年代前後、画像データ処理のために光学器材を整備し専門の写真技術者を雇用された。ラボではなくてアトリエだ等の周囲の雑音など無視し、錐を揉み込む様に当面の課題に集中しておられた。

新聞やテレビにも分りやすく対応し PR にも努めら

れた。講演では話術として大衆サービス過剰であると批判する識者も少なくないが、気象学の発展のためには一般社会からの有形無形の支持が大切と考えて居られた様におもわれる。

生前の活動的な藤田教授を知る者にとって、78歳の御逝去はあまりにもはやく、大変に残念である。改めて御業績を偲び、御冥福をお祈りし、同時に藤田教授の示された実証的かつ開拓的な気象学の研究が日本でも盛り上がることを願う。

二宮洸三（東京大学気候システム研究センター）